

被災地の子どもたちに富山薬売りの紙風船をお届け

富樫豊 栗原知子

私たちは東日本大震災の被災調査を目的にするかたわら、専門を超えて「私たちにできることは」として子どもの精神的ケアに関して北陸らしい富山らしいことができないかを考えた。もともと富山は薬の町。富山から日本各地に家庭医薬配置業（売薬）の方々が全国に飛び回っていて、いまでも紙風船を子ども用にプレゼントして配布している（写真上）。私たちがこれにならって、富山の薬売りの紙風船を1200個持って三陸の各地に出向き、小学校や避難所などで配り、一緒に遊ぶことにした。

4月27日から29日の日程で、28日に岩手県・陸前高田の小学校と第一中学校に向かった。陸前高田の小学校ではもう授業が再開されており、休み時間には児童は庭に出て大きな声で遊びまわっていた。ここでは、さすがに授業に割り込んで、とはいかなかった。校長先生に4～6年生全員分の紙風船をたくした。



次に訪れたのは陸前高田第一中学校である。陸前高田市で一番大きな避難所であり、数百名の方々が避難されていた（写真中）。もちろん体育館や教室には避難者やボランティアの方々でいっぱいであった。そこで、私たちは紙風船を子ども大人問わず全員に、しかも一人ひとりに手渡した。ただ実際に紙風船をお手玉のように楽しむ写真を撮りたかったのであるが、写真はNGということでご紹介できないのが残念である。

風船の手渡しの際に被災者の多くの方々とお話をした。年配の方には、（売薬の紙風船が）なつかしいと言っていた。子どもにとっては、この種の紙風船には珍しさもあって人気があった。一束欲しいという子どももいた（写真下）。夜になれば、皆さんは時間をもてあましぎみとあって、手軽に無意識にも風船をポンポンとつけることが、心の暇を埋めてくれるようでもあった。紙風船の一番いいところは、四角で手の平に乗るので何の技術もいらず、ポンポンとつけるところである。もちろん、皆さん、うれしそうに遊んでおられたというよりも、ごく自然に楽しんでおられた。



こうした雰囲気の中で、私たちは当初考えていた遊びの講習をやめ、静かに退出した。自然にご家族で楽しんでいるのが一番いいと思ったからだ。ささいなことが喜びに成ったことに私たちこそ、元気付けられた思いがした次第であった。

